2016年度研究大会　国語科協議会記録

指導助言　広島大学大学院教育学研究科教授　山元隆春

広島大学大学院教育学研究科教授　間瀬茂夫

（質疑応答・研究協議）授業者、発表者個々へは、「どの場面でファシリテートがなされていたのか」、『深い学び』になっていたのか」「普段からそのような場面を作る取り組みをされているのか」という質問がなされた。また教科全体への投げかけとして「ファシリテーターのイメージ」「学習の深まりを自覚させる方策」「評価の問題」などがなされた。

（間瀬）・「ファシリテーション」とは、「学習者の自立的な学習の過程で学習者の思考や活動を促進すること」。その意味で言えば今日の授業には「学習者の自立的な学習の過程」が見られなかった。それは今までの附属国語科のスタイルではないのかもしれないが、今求められているのであるから実践研究を進めて行かなければならないものである。今後に期待したい。

・「深い学び」とは「難しい問題を解くこと」とは違う。「価値が様々な」「まだ定まっていない」「仮説が複数ある」ものを考えることである。それはこれまで教師自身受けてきた授業スタイルとは違うので、戸惑いはあるだろうが同時にやりがいを感じてもらいたい。「問いを立てる」だけでなく「交通整理する」「励ます」ことも含めてファシリテートである。学習者個々で考えればいいのではなく、相手も考える、集団で考える、社会的関わりを持ちながら進める、それが「活動」である。そこをないがしろにしてほしくない。

・各授業における妥当性の検証。古田先生の授業は「思考のファシリテーション」は随所に見られた。もう少し問いを加えるならば、「忠度が託したものは何だったのか」「俊成が受け取ったものは何だったのか」「語り手はそのことをなぜ語ったのか、どのように語っているのか」という点も押さえたいところである。髙島先生の授業では「保吉にとって、母にとってそれぞれ『海』とは何か、どう違うのか」「このような語り方をしたのは何故か」を考えさせたかった。この作品は芥川にとっての「小説とは何か」を述べた文章だと捉えることもできる。多分学習者にとっての小説と芥川にとっての小説は違うと思われ、生徒感想にもそれが表れていたのではないか。

（山元）チンパンジーは他者に何かを教える際に手を添えることはない。人間は手を添える。その子をどういう人に育てたいのか、手を添える相手のことを思い浮かべれば自ずとやり方が違ってくる。例えば「自立した読者」に育てたいなら相手が「自分にジャストフィットした本を自分で選んで読み続けようとする」ためにどのように手を添えればいいのかを考える、それが教師の仕事である。「ファシリテート」という言葉は目的語を付けなければそれは「生き方」になる。そう考えると授業が変わってくるのではないだろうか。古田先生の授業は生徒の思考から始まるものだったので、ホンモノの反応、関心が生まれていた。ファシリテーターとしてどのように心と頭を使ったのかを見せてもらった授業であった。髙島先生の授業は、ともすれば「哲学」あるいは「小説論」になりそうなテキストをうまくもっていった。「どんなふうに終わったのだろう」と問うても面白かったのではないだろうか。共感能力を身に付けることも国語科の大切な目標である。文学的文章であれば「視点の獲得」であり、それが小説の読みである。だから文学作品は大事なのだ。主体的・対話的学びを通してどんな成果が得られたのか、検証していくことが今後の課題と言える。